

【エッセイ部門・PHP エッセイ賞】

おばあちゃんの英世

兵庫県立小野高等学校 第2学年 池町美花

あれは秋だったか、冬だったか、春だったか。なんとなく夏ではないことは確かなのだが、覚えていない。まあ正直季節はどうでもいい。とりあえず秋ということにしておこう。たぶん秋だ。たぶん。

あれは去年の秋のこと。ん、いや、やっぱり冬か。もしかして冬寄りの秋か。うん、たぶんそうだ。そういうことにしておこう。そろそろ季節論争に終止符を打たねば、本題に行き着く前に字数オーバーになる気しかしない。では、仕切り直して本題へと。

あれは去年の冬寄りの秋のこと。その日は休日だったが、午前中は部活のため学校へ行っていた。部活が終わり、電車で自宅の最寄駅まで帰ってきた。最寄駅といっても車で二十分ほどかかる。そのため、基本的には親が駅まで迎えに来てくれる。「自分で自転車で行けよ」という意見は受け付けない。こっちだっているいろいろ事情はあるのだ。体力とか体力とか、体力とか。危ない、話がズレてきている。とにかく、私は親に迎えに来てもらっているのだ。その日も私は駅から出た所で迎えの車を待っていた。数分待っていたら車が見えた。さて帰るか、という気持ちになった瞬間、その出来事は起きた。

この先は階段かねえ。これもはっきりとは覚えていないが、こんな感じの言葉が聞こえた。おばあちゃんの声だった。マダムと言ったほうがいいのか。まあ、おばあちゃんでもいいか。そのおばあちゃんは私に、「この駅には階段があるか」と尋ねたのだ。先程述べた最寄駅とは三木上の丸駅のことで、ここは改札を通ったあと、少し階段を上らなければならない。また、改札に辿り着くまでにそこそこ急な坂を登る必要もある。おばあちゃんは腰が曲がっていて、シルバーカーを押していた。ひとりで駅のホームまで行くのはかなり大変だ。若い高校生、手伝わないわけにはいかない。

何とか坂を登りきり、切符を買った。切符を買うとき、私は何も不便に思ったことはない。だが、腰の曲がったおばあちゃんからすると、券売機の位置が高くてお金を入れるのが難しいようだった。誰か手伝える人が常にいるとは考えにくいし、おまけにこの駅は駅員さんが不在のことも多い。バリアフリーって難しいと身にしみてわかった瞬間だった。

無事に切符を買うことができ、改札を通った。そして階段。私はシルバーカーを持ち、おばあちゃんは手すりを使って上った。上りきって、「よし、任務完了」と思ったとき、おばあちゃんは感謝の言葉を述べながら、コソコソとカバンから何かを取り出し始めた。お礼なんていいのに、と思いながらも、私の脳は「アメちゃんでもくれるのかな」と想像していた。

野口さんだった。野口英世がおばあちゃんの財布からひょっこり現れたのだ。みなさんお分かりだと思うが、本物の野口さんではない。千円札だ。まさかまさかまさかだった。「お

金はいっぱいあるから」的な言葉とともに半分に折られた千円札が私の手元にやってきたのである。温かった。おばあちゃんは、お小遣いの足しに、と渡してくれたが、使えるわけじゃないじゃないか。今でもたからものだ。

ここで文章が終わっていたならば、人の温もりを感じられるほっこり話で良かっただろう。だがしかし、ドジな私。これだけでは終わらない。

階段は改札を通ったあとにあるため、私は定期券で改札を通った。同一駅で入出場できると思っていたのだ。しかし、おばあちゃんとお別れしたあと、改札を通ろうと思って定期券をタッチするとエラー。なんてこった。定期券を使って同一駅で入出場するのは不可能なのだ。駅員さんに手続きしてもらおうものの、そこでもあたふた。伝わるかどうか分からないが、のりこし精算機のところに定期券をタッチしなければならなかったのに何故か改札のほうに行くとか。要するにアホみたいなことをしていたのだ。お恥ずかしい。おばあちゃんに気付かれてませんように。でも、改札を通らないとおばあちゃんは助けられなかったわけだし、まあいいか。

最後に、おばあちゃんへ。

お元気ですか。あのあと、無事に恵比須駅まで行けましたでしょうか。それと、お小遣いをくださったとき、「誰にも言ったらあかんよ」と言われたのですが、秘密が苦手でした母親には伝えてしまいました。ごめんなさい。お名前はお聞きしていませんし、もう会うことは難しいと思います。だからここで。大好きです。

そして、おばあちゃんの英世は今も引き出しの中に、人生初の見知らぬ方へのお手伝いと温もりの記念としてしまっています。おばあちゃんには申し訳ないけれど、やっぱり使えないや。お金としては使わないけど、優しさを思い出すために使います。ありがとう、おばあちゃん。またね。